

## 言語学習における情意面の一考察

### — Anxiety に関する先行研究の動向 —

竹 田 明 彦

(武庫川女子大学文学部英米文学科)

## A Study of the Affective Domain in Language Learning : A Literature Review on Learner's Anxiety

Akihiko Takeda

*Department of English, Faculty of Letters,*

*Mukogawa Women's University, Nishinomiya 663, Japan*

Anxiety is one of the key affective variables in language learning situations. Since a literature review done by Scovel in 1978, some studies on this variable have come to be conducted, but they provide us only with some isolated information. The purpose of this paper is to examine how these studies have progressed and to elucidate on what they have revealed. This review also demonstrates the development of studies on anxiety in language learning situations. It also discusses that there are some negative correlations between language anxiety and proficiency such as vocabulary and oral production.

学習者の情意的側面は一般的に言語習得にも大きな影響を及ぼすと言われてきたが、どのように言語学習に関わっているのかはまだ十分に解明されていない。情意領域の研究が遅れているのは、お互いに関わりあっている情意因子の複雑さに加えて、直接観察して数量化できない性質をもっているためでもある。

学習者の anxiety の研究は主として教育心理学の分野で研究が進められてきたが、それらの研究方法や研究結果を踏襲して、言語教育においても anxiety と言語学習の関わりの研究が次第に進められはじめた。本稿ではこれらの研究がいかに行われ、どの程度にまで解明されたかを文献研究によって探ってみたい。

### Scovel による Anxiety の定義

言語学習の領域における学習者の不安は Scovel (1978) の定義がもっともよく引用されている。Scovel は、Hilgard, Atkinson, and Atkinson (1971)<sup>1)</sup> の文献に基づいて、次のように定義している。

Anxiety is commonly described by psychologists as a state of apprehension, a vague fear that is only indirectly associated with an object<sup>2)</sup>.

この定義によると、anxiety とは「未来のことについての気遣い、懸念、心配」であり、「ある対象に向けられた漠然とした不安」である。Maslow の欲求階層説に当てはめると、それは安全欲求の現れであり、人間の欲求としては基本的ないわゆる低い次元の欲求のカテゴリーに属するものである。

### 教育心理学の分野での先行研究

Anxiety は一般的に学習を阻害すると信じられ、教育心理学の分野で数多くの研究が行われてきたが、学習に

及ぼす影響はそれほど単純なものではなかった。たとえば Verma and Nijhawan(1976) は intelligence の高い学習者に不安があると学習が促進され、intelligence が低い学習者に不安があると学習がうまく進まないという研究結果を報告している<sup>3)</sup>。Beeman, Martin, and Meyers(1972) は学習の段階によって、学習の初期段階では不安が学習の阻害要因になり、同じ学習活動が進められた後の時点では促進要因になっていることを報告している<sup>4)</sup>。Spielberger(1966) も、anxiety は IQ の高い生徒には積極的に学習しようとする動機となり、IQ の低い生徒にはマイナスになるという仮説をたて<sup>5)</sup>、後に Gaudry and Fitzgerald(1971) がこの仮説を検証している<sup>6)</sup>。

## Anxiety と Language Acquisition の初期の研究

言語学習の領域でも 1960 年代になって情意領域の研究が進むようになり、その一部として anxiety の問題が取り上げられてきた。ところが先行研究では anxiety が及ぼす学習上の影響についてかならずしも一致した結論が得られなかった。Swain and Burnaby(1976) は英語を話す子供を対象にしたフランス語の immersion program の中で、フランス語の能力と不安にはマイナス相関があることを発見したが、他の能力尺度を用いると相関関係が見られないという矛盾した結果を得た<sup>7)</sup>。Tucker, Hamayan, and Genesee(1976) もフランス語と不安の関係を研究して、あるレベルの能力はマイナス相関があるが、別のレベルでは相関が見られないという矛盾した結果を得ている<sup>8)</sup>。Chastain(1975) は、audio-lingual method で学んだ学習者のフランス語の成績と anxiety はマイナス相関があり、traditional method でドイツ語とフランス語を学んだ学習者の成績と anxiety には相関がなかったことを報告している<sup>9)</sup>。このような先行研究を振り返って、Scovel は次のように述べている。

The research into the relationship of anxiety to foreign language learning has provided mixed and confusing results, immediately suggesting that anxiety itself is neither a simple nor well-understood psychological construct and that it is perhaps premature to attempt to relate it to the global and comprehensive task of language acquisition<sup>10)</sup>.

## Anxiety の概念の細分化

Anxiety と language achievement の相関を調べて出て来る矛盾の原因の 1 つに anxiety そのものが曖昧で漠然としていることから、anxiety を細分化して研究する動きが出てきた。その 1 つに facilitating anxiety と debilitating anxiety という考え方がある。Facilitating anxiety とは、たとえば母国語の話者が避けるような構文を学習者が進んで使うよう自らに促す衝動を言い(例 : Nervousness while using English helps me do better.), その反対の衝動を debilitating anxiety という。

Facilitating anxiety is an increase in drive level which results in improved performance while debilitating anxiety is an increase in arousal or drive level which leads to poor performance<sup>11)</sup>.

Alpert and Haber(1960) はこのような 2 つの anxiety に基づいて Facilitating/Debilitating Anxiety Scale を開発した<sup>12)</sup>。この scale を用いた研究の中に Kleinmann(1977) がある。彼の研究では、スペイン語やポルトガル語を母国語として話す英語学習者の場合、facilitating anxiety の高い学生は、文の構造が母国語とは全く異なっている infinitive complement や direct object pronoun などの言語事項を進んで使う傾向があるという結果が得られた。またアラビア語を母国語とする学習者でも同じような結果を得ている<sup>13)</sup>。

Bailey(1983) は日記によって competitiveness(競争心)と anxiety の関係を細かく記述してとらえ、競争心を持った第二言語の学習者が自分と他の学習者や理想の自己を比べて anxiety を持ち、それが二通りに作用する過程(facilitating anxiety/debilitating anxiety)をもっとも純化した形で図解している<sup>14)</sup>(Fig.1)。

Anxiety を別の観点から、trait anxiety と state anxiety として捉える考え方もでてきた。Trait anxiety とはどのような状況であっても不安になる可能性(likelihood)である。高い trait anxiety を持った人は認知活動(cognitive functioning)が弱まり、記憶が邪魔され、回避行動をするようになる。State anxiety は、例えば試験の前のような特定の状況下で経験される不安である。一般的に不安傾向(trait anxiety)の高い人は、特定の

# 言語学習における情意面の一考察

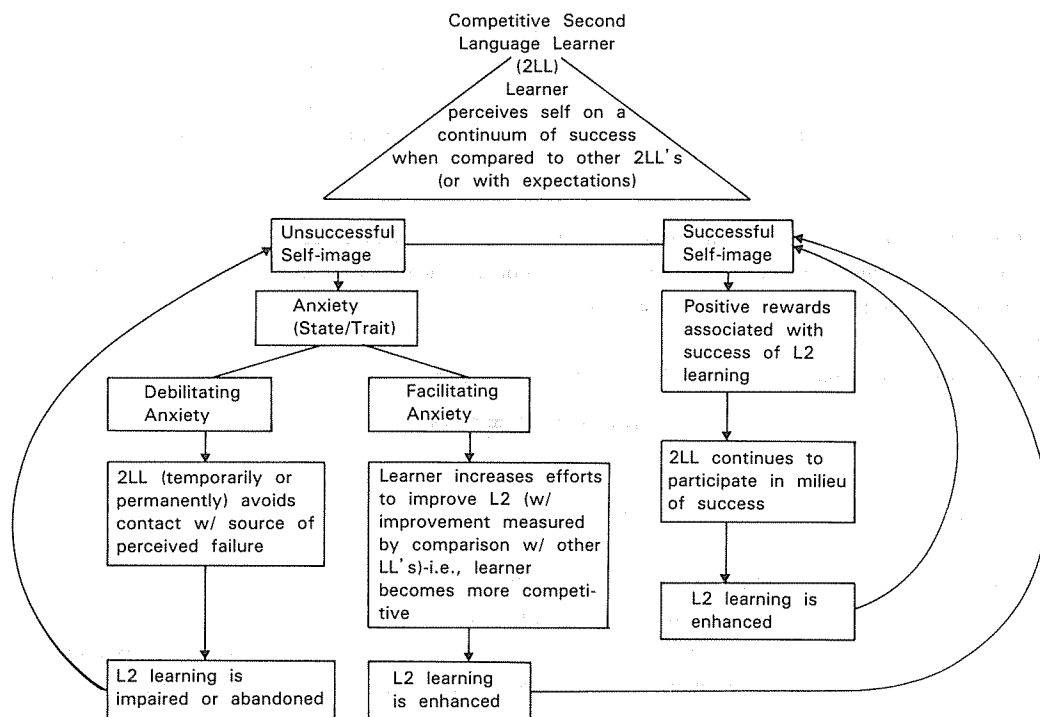


Fig. 1 Competitiveness and the second language learner

ストレスがある状況下ではより高いstate anxietyを示すことになる。Trait anxietyとstate anxietyについてYoung(1986)は次のようにまとめている。

Whereas state anxiety reflects an “unpleasant emotional state or condition,” trait anxiety is regarded as a “relatively stable individual difference in anxiety-proneness as a personality trait.” State anxiety is marked by subjective feelings of worry, apprehension, nervousness, and tension and by activation of the individual’s nervous system. It is transitory; that is, it is not a long-lasting personality feature but a feature that surfaces in response to a particular situation<sup>15)</sup>.

State anxiety の概念を基盤にして、特定の状況で起こってくる不安 (situation specific anxiety) を調べようとする研究もでてきた。言語学習における特定の状況で起こる不安は一般的に language anxiety と言われる。Trait anxiety と language anxiety がそれぞれ言語学習にどのように関連を持っているのかが調査された。Lalonde and Gardner(1984) は態度とモチベーションの原因の研究で、trait anxiety は態度やモチベーションに影響しないが、language anxiety の役割は認められたと報告している<sup>16)</sup>。Horwitz(1986) の研究では language anxiety と trait anxiety の関係は見られなかった<sup>17)</sup>。Gardner, Moorcroft, and MacIntyre(1987) は language anxiety と vocabulary production の関係は認められるが、trait anxiety と second-language production の相関は認められなかったと述べている<sup>18)</sup>。

言語学習の場面にに基づき language anxiety の内容をより具体的に分けた研究もある。Horwitz, Horwitz, and Cope(1986) は外国語学習者の anxiety を communication apprehension, fear of negative evaluation, test anxiety の3つに分けて考えた<sup>19)</sup>。第1に、外国語を学ぶ生徒は考え方は大人の思考を持っているが、それを表現するための語彙は乏しい。自分をうまく表現できないことや、他人の言ったことがわからないことからくるフ

ラストレーションや不安 (communicative apprehension) がある。第2に、学習者は自分が意図していることがうまく伝わったかどうか、どのように評価されているかを気遣う (fear of negative evaluation), 第3に学習者はたえず能力をテストされる不安 (test anxiety) を持っている。彼らはこの3種類の不安が言語学習に悪い影響を及ぼしていると考えた。Bailey(1983) は他言語を話している人の英語 (English to Speakers of Other Languages) 学習の中で想定される不安の原因を示している。

- Comparison of oneself with other students, either for their performance, or for their anxiety levels.
- One's relationship with the teacher, either in relation to one's perception of the teacher's expectations or one's need to gain the teacher's approval.
- Tests.
- Comparison with oneself, and one's own personal standards and goals.<sup>20)</sup>

### Anxiety 測定法の開発

不安は直接的に観察できるものではないから、ある一定の状況のもとで人がどのように感じたり、思ったりするかを第三者が推測する以外にない。推測の資料を得る方法としては、質問紙法がもっともよく用いられ、他に日記法や Digit Span Test がある。

Anxiety は単純にそれだけが調査研究されるよりも、attitude and motivation の研究の中で、情意因子の一部として取り上げることが多かった。第二言語学習における anxiety の役割を見きわめようとする最初のころの研究は心理学によって作られた一般的な不安測定の尺度を用いた。この尺度の代表的なものは Sarason Test Anxiety Scale(1958)<sup>21)</sup> や Taylor Manifest Anxiety Scale(1953)<sup>22)</sup> であった。これらの尺度を用いた研究には、Chastain(1975)<sup>23)</sup> や Gardner and Lambert(1959)<sup>24)</sup> などがあるが、一貫して学習との有意な相関を導き出せなかった。

Anxiety そのものを、trait anxiety, state anxiety, language anxiety などに細分化して考えるようになって質問項目もそれに合わせて作られた。例えば Sarason(1986) の Test Anxiety Scale<sup>25)</sup> や Spielberger の State Anxiety Scale<sup>26)</sup> がある。

Ely(1986) も自己意識 (self-consciousness) と、学習者が授業に出たときに経験する戸惑い (embarrassment) を表す不安テスト (Scale of Language Class Discomfort) を開発した。

情意因子を測る質問紙の一部として Ely が作った Language Class Discomfort の項目は次の5項目である。この質問項目はすべて speaking における不安を想定して作られているので、さらに他の領域 (listening, reading, writing) での不安の項目も問う必要があろう。

- I don't feel very relaxed when I speak Spanish in class.
- Based on my class experience so far, I think that one barrier to my future use of Spanish is my discomfort when speaking.
- At times, I feel somewhat embarrassed in class when I'm trying to speak.
- I think I'm less self-conscious about actively participating in Spanish class than most of the other students.
- I sometimes feel awkward speaking Spanish.<sup>27)</sup>

学習者が実際に言葉を学んでいるときに感じたり見たりしたことを記録して、それに基づいて情意因子を分析するという研究もある。このような日記による自己申告を通しての研究は、「学習者が言語学習上の出来事や自分の気持ちを体系だてて素直に書き、その後、日記に書いた事柄を公の目に触れるために、他人の名誉を傷けたり、自分にとって都合の悪い事項は削除するなどして書きなおしをする。研究者はその記載事項の中で言語学習にとって重要である部分の検討をしていく」という形で進められる。

Digit Span Test は、長さの異なる一連のアラビア数字を聞いた後でその数字を前や後ろに繰り返す作業を課

すテストである。このテストは短期の記憶力と集中力を必要とするから、それによって state anxiety の影響力を調べることができると考えられた。いろいろな不安状況を意図的につくり、現れる作業能率を調べて不安を数量化した。この Digit Span Test を用いた古い研究としては Moldawsky and Moldawsky(1952) があるが<sup>28)</sup>、現在の研究でも他の不安尺度と併用して使われることがある。最近の研究では MacIntyre and Gardner(1991) がフランス語と英語による Digit Span Test を行っている<sup>29)</sup>。

## Language Anxiety が Language Achievement に影響を及ぼすメカニズム

Anxiety scale の開発と因子分析などの統計処理の進歩によって、anxiety が言語学習の成功の鍵を握る要因の

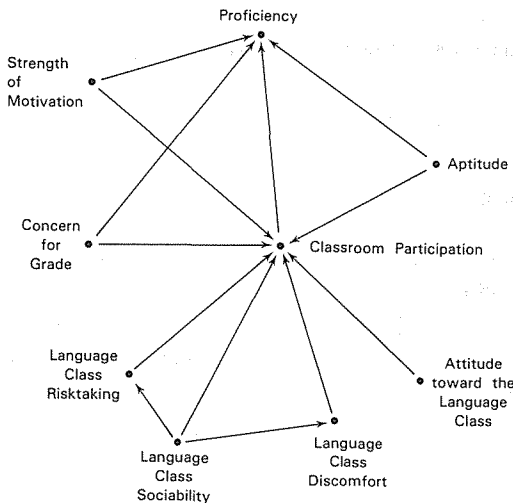


Fig. 2. Theoretical model for investigation

と社交性 (sociability) は学力とそれぞれマイナス相関し、冒険心は授業中の言語活動への参加とプラスの相関があることを明らかにした<sup>30)</sup>。

一つであることが明らかにされてきたが、anxiety が学習者の achievement に影響していくメカニズムはどのようになっているのであろうか。Gardner や Lambert は attitude および motivation と language achievement の関連を調べる一連の研究で、不安をモチベーションと関連する一因として考えた。Bailey は facilitating anxiety と debilitating anxiety がどのように学習に作用するかを図示している。

(p. 51 Fig. 1)

Ely(1986) は不安が学力に及ぼすメカニズムを学習者の授業中の言語活動への参加 (classroom participation) を軸にして考えた。学習者の情意因子が授業中の自発的な言語活動に影響し、そのクラス参加の程度が言語学力に影響を及ぼすと言うのが基本的な考え方であった。

(Fig. 2)

この仮説に基づき検証が試みられた。その結果、授業中の不安 (classroom discomfort) と冒険心 (risktaking)

## 6. 最近の研究成果

Scovel(1978) の literature review 以降の研究では anxiety を細分化して、language learning のいろいろな側面との相関をみるという方向に研究が進んだ。その結果次のことが明らかにされた。

前述したように trait anxiety に関する研究では、trait anxiety は language learning にほとんど影響を及ぼさないことが明らかにされた。Lalonde and Gardner(1984) の言語学習における態度や motivation の要因の研究では language anxiety の役割は明らかにされたが、trait anxiety の役割は証明されなかった<sup>31)</sup>。Gardner, Moorcroft and MacIntyre(1987) でも、trait anxiety と second language production には相関関係が見られなかったと報告している<sup>32)</sup>。

Language anxiety と proficiency の関係を調査する研究が数多く行われるようになり、一般的にマイナスの相関があることが明らかにされてきた。Lalonde and Gardner(1984) は situational anxiety すなわち language anxiety が学習態度や motivation に影響していることを明らかにした<sup>33)</sup>。Steinberg and Horwitz(1986) は第二言語習得の場で作為的に anxiety を引き出したグループと anxiety のレベルを下げたグループを作り比較して、学習者は anxiety level が高くなると、曖昧な場面に対して、事実だけを述べて、自分の解釈は差しはさまない傾向があることを明らかにした<sup>34)</sup>。Gardner, Moorcroft and MacIntyre(1987) は、French class anxiety と French use anxiety が語彙力に影響を与えることを明らかにした<sup>35)</sup>。MacIntyre and Gardner(1988) は因子分析によって、第 2 因子として取り出した French class anxiety, French use anxiety, English class anxiety, Audience anxiety を含む因子がフランス語の語彙力とマイナスの相関があると報告して、その原因を本来は言

語運用 (performance) に割り当てられる注意力のエネルギーや認知的なエネルギーを anxiety が消費するためであろうと予想している<sup>36)</sup>。

Anxiety が影響を及ぼすと予想される学習のいろいろな側面に焦点を当てた研究もある。Tobias(1986) は、学習を input, processing, output の3段階に分けて調べ、いずれの段階においても anxiety が情報を分析する力を弱めるとしている<sup>37)</sup>。その他の研究でも language anxiety が output stage で、言語運用能力に影響を及ぼしていることが明らかになってきている。Bailey(1983) は日記によって授業の中の学習者心理をダイナミックに捉え、anxiety と oral proficiency には、前者が後者に影響しているのか、あるいは後者が前者の原因なのか分からないが、いずれにしても両者には確かに関係があると結論している<sup>38)</sup>。

Ely(1986) では内向性の学習者は不安 (discomfort) を持ち、進んで物事に答えようとせず、言語運用能力も劣っていることを明らかにした<sup>39)</sup>。MacIntyre and Gardner(1991) の研究でも、anxiety は長期記憶したものを取り出す過程に邪魔をする要因となりうるから production は影響を受けるとしている。Input stage でも anxiety はマイナス効果をもたらしているように考えられると述べ、anxiety が原因で短期記憶が弱められ、理解力に影響が出ると推論している<sup>40)</sup>。

## 今後の課題

Target language でコミュニケーションを図るときの不安が言語能力に影響を及ぼす一方で、言語能力も state anxiety に絶えず影響を与えている。たとえばフランス語の授業を想定すると、授業の中で起こってくるいろいろな不安 (language anxiety) がフランス語の能力に影響する。その能力が足りないために不安が強化される。Anxiety と言語の能力はこのような循環 (circularity) をしているものらしい。これまで言語学習の領域での anxiety が細分化され、言語能力との相関が調査研究されてきた。最近では言語学習の状況も細分化され anxiety との関係が研究されている。言語学習状況の中で不安が言語能力に影響するメカニズムがさらに仮説され検証されることによって、今後その実態が解明されることになるであろう。

## 註

- 1) Hilgard, E., Atkinson, and Atkinson, *Introduction to Psychology*, New York, Harcourt, Brace, and World. (1971)
- 2) Scovel, T., *Language Learning*, 28, p.134(1978)
- 3) Verma, P. and Nijhawan, H., *Journal of Experimental Child Psychology*, 22, pp. 302-308(1976)
- 4) Beeman, P., Martin, R., and Meyers, J., in *Anxiety: Current Trends in Theory and Research*, ed. Spielberger C., Academic Press, New York, (1972)
- 5) Spielberger, C., *Anxiety and Behavior*, Academic Press, New York, (1966)
- 6) Gaudry, E. and Fitzgerald, D., in *Anxiety and Educational Achievement*, ed. Gaudry, E. and Spielberger, C., John Wiley and Sons, Sydney, (1971)
- 1) と 3)~6) は前掲 2) p.136 を参照した。
- 7) Swain, M. and Burnaby, B., 'Personality Characteristics and Second Language Learning in Young Children : a pilot study', *Working papers in Bilingualism*, 11, pp.115-128(1976)  
前掲 2) p.132 を参照した。
- 8) Tucker, R., Hamayan, E., and Genesee, F., *Canadian Modern Language Review*, 32 pp.214-226(1976)
- 9) Chastain, K., *Language Learning*, 25, pp.153-161(1975)
- 10) 前掲 2) p.132
- 11) Young, D., *Foreign Language Annals*, 19, p.440(1986)
- 12) Alpert, R. and Haber, R. N., *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 61, pp.207-215(1960)
- 13) Kleinmann, H., *Language Learning*, 27, pp.93-107(1977)
- 14) Bailey, K. M., in *Classroom Oriented Research in Second Language Acquisition*, ed. Selinger, H.

- W., and Long, H. M., Newbury House Publishers, Rowley, p.97(1983)
- 15) 前掲 11) p. 441
- 16) Lalonde, R. N. and Gardner, R. C., *Canadian Journal of Behavioral Science*, **16**, pp.224-237(1984)
- 17) Horwitz, E. K., *TESOL Quarterly*, **20**, pp.559-562(1986)
- 18) Gardner, R. C., Moorcroft, R., and MacIntyre, R. D., 'The role of anxiety in second language performance of language dropouts' (Research Bulletin NO. 657). London, Ontario : The University of Western Ontario (1987)
- MacIntyre and Gardner (1991) p.108を参照した.
- 19) Horwitz, E. K., Horwitz, H. B. and Cope, J., *The Modern Language Journal*, **70**, pp.125-132(1986)
- 20) Bailey, K. M., 'Competitiveness and anxiety in adult second language learning : Looking at and through the diary studies', in Seliger and Long (1983)
- Skehan, P., *Individual Differences in Second-Language Learning*, p.116(1989) より Bailey(1983) についてのまとめを引用した.
- 21) Sarason, S. B., *Child Development*, **29**, pp.105-115(1958)
- 22) Taylor, J. A., *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **48**, pp.285-290(1953)
- 20)21) は Skehan p.116(1989) を参照した.
- 23) 前掲 9)
- 24) Gardner, R. C., and Lambert, W. E., *Canadian Journal of Psychology*, **13**, pp.266-272(1959)
- 25) Sarason, I. G., Test anxiety, Worry, and Cognitive Interference, in *Self-related Cognition in Anxiety and Motivation*(pp. 19-33), ed. Schwarzer, R., Hillsdale, Lawrence Erlbaum Associates, New Jersey (1986)
- 25) と 26) は *Language Learning*, **41** p.105 と p.107 を参照した.
- 26) Spielberger, C. D., *Manual for the State-Trait Anxiety Inventory (Form Y)*, Palo Alto, California : Consulting Psychologist Press (1983)
- 27) Ely, C. M., *Language Learning*, **36**, p.10(1986)
- 28) Moldawsky, S., and Moldawsky, P. C., *Journal of Consulting Psychology*, **16**, pp.115-118(1952)
- 29) MacIntyre, P. D., and Gardner, R. C., *Language Learning*, **41**, pp.513-534(1991)
- 30) 前掲 27) Ely p. 6
- 31) 前掲 16)
- 32) 前掲 18)
- 33) 前掲 16)
- 34) Steinberg, F. S., and Horwitz, E. K., *TESOL Quarterly*, **20**, pp.131-136(1986)
- 35) 前掲 18)
- 36) MacIntyre, P. D., and Gardner, R. C., The measurement of anxiety and applications to second language learning : An annotated bibliography (Research Bulletin NO. 672). Ontario, Canada, The University of Western Ontario, (1988)
- 35)36) は *Language Learning*, **39** pp.253-254(1989) を参照した.
- 37) Tobias, S., in *Self-related Cognition in Anxiety and Motivation*, ed. Schwarzer, R., Hillsdale, Lawrence Erlbaum Associates, New Jersey, (1986)
- 38) 前掲 14)
- 39) 前掲 27)
- 40) 前掲 29)

